

紹介と批判を連ねてきた。特に三つの疑問点が本書の誤読から生じているとするならば、甚だ申訳のない次第であるが、本書の日本古代史の理論的な研究において占める価値を重視するが故に、率直な疑問の提出を試みた次第である。著者ならびに大方の御教示を頂ければ幸いである。(一九五九・六・六)

(A5版二二二頁 昭和三十三年一月 御茶の水書房発行 定価三〇〇円)

安藤精一著

近世在方商業の研究

原田伴彦

戦後における社会経済史の研究はめざましいものがある。とくに近世の農村の分野においてそれが著しかった。ここ数年、近世史関係の学術論文が、毎年五百篇前後に及ぶといわれるが、その大半が農村に関するものであることは、その一端を示すものといえよう。ところでこの農村史の研究で従来いちばん中心となつたのは封建的自営農の形成の問題と、その解体をめぐる寄生地主制の成立ならびに農民闘争などの問題であつた。しかるに、さいきんとくに注目をあびはじめたのが、封建農村の解体過程における商品流通の展開の問題であるといえよう。この農村における商品流通の展開が、封建

農村のみならず、封建制全般を揺がすものとしての観点からの農村史の研究は、実は決して新しいものではなく、戦前から、基本的な課題としてたえず注目されてきたものであり、戦後においても農民的商品経済あるいは在郷商人の動向の究明が、理論的にも要請され、その研究もほつほつ進められていたのであつた。しかし、この点について、基礎的な実証的な研究、とくに全国的視野からの考察がほとんど実質的に行われておらず、我々をして、はなはだ隔靴搔痒の感を抱かしてゐたのは、まぎれもない事実であつた。この時に當つて、安藤氏の近世在方商業についての大著を得たことは、非常な喜びといわねばならない。氏は数年前から和歌山大学の機関誌『経済理論』を中心として、『史学雑誌』『日本史研究』などに、在方商業に関する精緻な力篇を、次々と精力的に発表されてきたのであるが、これらの諸論稿を基礎にさらに多くの筆を加えて、近世在方商業についての一応の帰結と見透しを一本に集大成されたのが本書である。本書の上梓を個人的にも最も待望していた一人として、その刊行を祝するとともに、その内容について若干の紹介を行いたいと思う。

本書は、第一章「序説」、第二章「近世初期の在方商業と特権商業」、第三章「近世在方商業の展開」、第四章「在方商業の発達と町方商業との関係」、第五章「近世における在方商業論」、第六章「結論」より成つているが、氏が特に力を注がれたのが、本書の約四分の三のスペースを占める第三章及び第四章であつて、農民の商人化と、在方商業の発達と町方商業の対立という、二点を中心に、在方商業についての詳細な基礎的考察を行つたものである。

まづ第二章「近世初期の在方商業と特権商業」は、近世封建社会

の成立当初の在方商業の状態を、領主の商業政策を通じて検討したもので、農民の商人化および在方商業に対する禁止は封建社会の原則的な理念であるが、現実においては、近世封建社会はある程度の商品流通の展開を前提としているのであつて、封建領主も在町の設定あるいは特権的な在方商人を認めざるを得なかつた事情、さらに在方商業の禁止が特に嚴重になつてくるのは、近世中期以降のことであることを論じたものである。そして近世初期以来の特殊な形態の特権的在方商業として、地域的、由緒的、座的なもの三者を分類し、地域的なものとして、新田村の特権の例や在町設定を挙げ、由緒的なものとして甲州九一色郷の場合を考察し、座的なものとして、紀北の賤民部落の蠟皮及び雪踏直しの商工業を述べている。とくに最後のものは、さいきん漸く研究の緒にいたばかりの、未解放部落の歴史の、とくに農村商工業の実態を示すものとして、注目すべきものといえよう。

第三章「近世在方商業の展開」は五節から成り、在方商業を広義に在方で行われる商業と理解し、「在方の市」、「在方小商業」、「在出商業」、「農民的商品生産と結びついた狭義の在方商業」、そして最後に「在方商人化の傾向」について、広汎な検討が加えられたものである。第一節の在方の市では、東北・関東・中部・近畿・中国・九州の諸地域に分けて、その盛衰を詳しく展望し、大つかみに見れば、近世在方商業に占める市の役割は一般的にいつて支配的ではなく、先進地においては、むしろ在町を中心に局地的市場圏が形成されていること、後進地に市の残存の多く見られることを指摘している。この近世農村の市の概観は、従来その整理の必要が痛感されて

いながらも、ほとんど行われていなかつたものであり、今後この方面の研究の進化に資すること多大なものがあろう。第二節では、農民の消費面に關係する在方小商業として、農民の日常生活必需品を販売する貧農の小商業が近世中期から次第に顯著になつた点を、加賀・岡山・津山・鳥取・長州の諸藩を中心に考究し、これら「ざるふり商人」の増大が、農民の土地からの離脱とその商人化を招くとともに、農村奉公人の不足という現象とからみあつて、封建制の基礎をなす農業経営に支障をきたすに至つた事情を説明したものである。第三節の在出商業は、農村の「ざるふり」に対比される都市の小商人の在方へのざるふり商業を扱つたもの。岡山・鳥取・長州藩などを中心に考察が進められ、これらの在出商人は、町方商人の階層分化の結果生れたものであるとともに、同時に、農民が町方に出て小商人化したものもあること、とくにこの後者が在方において問題にされるに至つたことの指摘が行われている。第四節に至つて、

在方商業の中心課題である狭義の在方商業の問題が、加賀藩・紀州地方・岡山藩・津山藩・鳥取藩などの事例を通じて考察されている。ここでは、近世中期以降の、農村における商品生産の発展とそれに対応する在方商人の動向、さらに在方の商品流通の形態、町方商人や三都商人あるいは近江商人との關係、またそれに伴う諸藩の商業統制の方策などが、種々の角度から検討される。最後の第五節では、在方商人化の一般的傾向について、農民的商品生産の發展・在方商人層の成長・農民の消費に關する在方商業の展開という三者の結びつきを指標として、先進地・中間地・後進地の特色に対する展望が行われている。

さて、これまでの在方商業展開の過程をふまえて、在方商業の発展と町方商業との対立関係を詳細に検討したのが第四章である。けれど、マルクスによれば都市と農村との分離・対立は全経済史を要約しようとするまでいわれるが、著者はこの観点から、近世初頭に町方と在方の分離が実施され、町方商業の保護と原則的には在方商業が禁止されたにもかかわらず、近世中期以後は、在方商業が、いつまでも特権的な町方商業の支配に従属することなく、両者は対立関係に入り、ついに町方商業を衰微させて幕末に至る過程を、豊富な史料を駆使して実証されている。考察の対象となつた地域は、越後では長岡藩・村上藩及び小千谷地方、信濃では上田藩及び善光寺宿、紀州では、橋本町と田辺藩、さらに津山・鳥取・中津・仙台・加賀・岡山・宇和島の諸藩の広汎な範囲に亘っている。各地域の歴史的客観的条件のちがひによつて、その対立の展開過程は必ずしも同一ではないが、ほぼ対立の表面化する時期は、享保及び享保をややすぎる頃からであり、そのいずれの地域においても、町方の特権的な商業組織が新しい段階の商品生産・商品流通に適合しなくなり、またこれに対する領主側の対応策も、例外なく消極的であり、町方商業が在方商業に圧倒されて行くというのがその結論である。またこれと関連することであるが、在方商業の発展が町方商業と対立することに対する否定的な見解——例えば、在方商人がやがて領主的統制の枠に組込まれ彼等が農民経済の発展の芽を摘みとる封建的取奪者となるという説、在方商人も結局は領主的支配を凌いで伸張してきた新しき都市資本に及びえなかつたという説あるいは、在方商人の成長は都市商人との基本的な対抗関係に進まず、それはあくまで特

権的買占商人の一構造部分としての相対的対立にすぎないという説等々の見解に対して、著者は批判を加え、在方商人が、町方商人の支配する旧特権的な流通組織を打破してゆく面で、町方商業と鋭く対立するということを、具体的な実証で説明している。この点は、本書の中心的テーマをなすもので、頗る注目に価するものがあるといえる。

第五章の「近世における在方商業論」は、元禄享保期から、当時の識者が、封建支配の矛盾的存在として登場する在方商業についてのような見方をしていたかを、論じたもので、在方商業の肯定論については、商品流通の矛盾がまだ顕在化しなかつた中期頃に多く、論者は農民的立場に立つ側のものであつたこと、否定論は、農民層分解が進行し、身分制が崩れて行く天明期以降に、領主的立場に立つものによつて多く出されている点の説明が加えられている。第六章「結論」は、これまでの論述の総括を行うとともに、著者の今後の研究を進めるための試論として、若干の意見を開陳したものである。その主要な点は、近世封建社会の崩壊過程をめぐつて、封建的な面を強調する立場とブルジョア的な面を高く評価する見解の対立に関して、著者は、封建的な停滞的な性格や、さまざまな後れた制約を認めつつも、近世中期以降、特に幕末期は、前期のブルジョア的な性格をもちつつあつたことをむしろ主張していることである。即ち、著者は、(一)マルクスの近世日本についての純粹封建社会とする規定や、最近問題になつている、イギリスに関する大塚久雄氏の遠隔地間商業と局地的市場圏の理論などを、そのまま機械的に近世日本に適用して、近世日本の商品流通は遠隔地間商品流通が支配的

であつて、局地的市場圏をほとんど欠如したとして、封建的性格を強く主張する学説に対して、多大の疑問を提出し、(二)これに関連して、封建的共同体を揺崩してゆく局地内の商品流通の展開や、土地から切り離された日傭労働者層の出現など、近代的方向への萌芽を注目して、(三)それとともに在方商人の寄生地主化を過大評価する考へ方にも反対の意向を表明している。

以上が本書の内容の梗概である。四百二十頁余に上る力作の全くの荒筋の説明であるが、すでに述べたように、本書は、極めて実証的な着実な研究であつて、文中すべて豊富な具体的史料に充ち溢れているといつてよい。また著者の一応の結論の出方は極めて慎重であつて、むしろ大きな具体的事実を以て結論を語らしめている観がある。従つて、本書の中心問題となつている、在方商業と町方商業の対立の問題や、農民の商人化の進行に伴つて幅においても深さにおいても在方商品流通の発展することから導き出される、封建的停滞性論への批判の如きも、恣意的、主観的なものではなくて、事実の実証的裏付けをもつ、きわめて説得性のあるものとなつている。本書において一貫した底流となつている農民の商人化、在方商人の発展、その町方商業との対立、特権的町方商業の衰退、ひいては封建的諸関係の動揺をもたらす町方商業の意義の積極的評価という、著者の論点について、異論ある人も少くはないと思われるが、すくなくともその異論の呈出は、簡略論的ないたすら空虚論的議論ではなくして、本書に匹敵する具体的事実の検証を以て行われねばならぬとさえ思われるほどである。もちろん、本書は広汎な地域に亘る考察であるが、限られた諸藩を対象としており、また藩を単位

とする鳥瞰的考察を多く含み、上からの藩政史料を中心としたという史料制約もあり、三都や先進的経済都市を含む諸地域における町方と在方との関係についての考察を欠いているという点にも、論及の限界をもつている。しかしそれにも拘らず、本書のもつ価値は、近世在方商業に関する最初の包括的且つ系統的な集成として頗る多大なるものがある。従来、我々が漠然と捉えていた在方商業の実態は、ここに確固とした骨脈と豊かな肉付けが与えられたといえよう。近世の商業史は、これまで都市の面においては、宮本又次氏ら諸先学によつて高い水準に引きあげられているが、農村の面における総括的検討は、今後、本書を新しい礎石として進められねばならぬ、といつて必ずしも言い過ぎでないと思われる。なお町方と在方の商業的対立に関しては、都市の分野からする検討も必要であり、十八世紀中葉以降の都市々況の停滞、町方商業の萎縮は、在方商業の発展のみならず、その他の諸要因、例えば、領主財政の破綻、武士生活の窮迫による都市消費市場の狭隘化、都市商業への課税的圧迫、ギルド的独占に伴う市場の動脈硬化的現象の発生、等々をも考えねばならぬが、これらの点をも含めて、町方方を包括する近世後期市場構造に関するより高度の考察が必要であらう。著者も序文で、今後は在方における商品生産と流通そのものの考察の深化、さらに町方を含めての商品流通一般の諸問題の考究に歩を進めたいと断つておられるが、これらの点に関する、著者の今後の研鑽を待望して、燕雑な紹介を終る次第である。(A5四二二頁 一九

五八年一月 吉川弘文館発行 定価七八〇円)